

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『トロイラスとクレシダ』に見られる反ホメーロスの叙述姿勢 <エッセイ>
Author(s)	酒見, 紀成
Citation	プロピレア , 20 : 64 - 73
Issue Date	2014-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039093
Right	Copyright (c) 2014 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



『トロイラスとクレシダ』に見られる

反ホメーロスの叙述姿勢

酒見 紀成

シェイクスピアのこの作品の読後感は、正直なところ、あまり後味が良くなかった。作品は「おまえさんたちへの遺産が梅毒だけとは同情するよ」で終わっているのである。これは「消え失せろ、周旋屋。死ぬまで生き恥をさらすがいい、死んでもきさまの汚名はさらに生きつつけるがいい」とトロイラスに言われたパンダラスの言葉である。クレシダの心変わりには自分のせいではないのに、とパンダラスは思わなかっただろうか。そう、シェイクスピアではトロイラスはまだ生きている。一方、材源であるチョーサーの『トロイルスとクリセイデ』では、アキレウスの手にかかって死んだトロイルスの魂は、昇天して至福に達し、「すべては空しいものだ」と観ずる。そして自分の殺された場所を見下ろして、自分の死を嘆く人たちの悲しみを心の中で笑うのである。こちらには救いがある。が、シェイクスピアには救いがない。これが一番の違いではないだろうか。

違いは他にもある。チョーサーのクリセイデは寡婦であり、父のカルカスがトロイを裏切ったため、肩身の狭い思いをして生きている。一方、クレシダは才気煥発で、したたかな乙女であり、ギリシア側の名将ユリシーズの目には「あのような浮気女は口も達者なら、色事も達者だ」と映る。これはクレシダの心変わりの伏線のようなもので、作品を薄っぺらにしている。クリセイデには *Frailty, thy name is woman!* と言いたくなるが、クレシダには、トロイラスは正直すぎて

見る目がなかったのだ、とならないだろうか。

もう一つ、シェイクスピアの『トロイラスとクレシダ』に抵抗を覚えたのは、サーサイティーズという非常に口汚いギリシア人が登場することである。この人物は道化の役もしているのであるが、それにしても口が悪い。パトロクロスからも「ことばがすぎるぞ、サーサイティーズ」とたしなめられている。もっとも、本質をつくこともある。例えば、「ことの起こりは間男と淫売女じゃねえか、いがみあい、徒党をくみ、血を流して死んじまうには、ごりっばな大義名分だ」と言う時。

それから残念だったのはヘクターの殺され方である。休もうとして武具を外しているヘクターを見つけて、アキリーズは堂々と闘うのではなく、部下たちに四方八方から襲わせているのだ。これではギリシア軍随一の英雄アキレウスの名がすたるというもの。

これは数年前にシェイクスピアの『トロイラスとクレシダ』（小田島雄志訳、1983）を読んだ時の感想である。この感想文を出発点にして、中世に人気のあったトロイロスとブリセイダの恋物語と、それ以前のトロイア戦争物語についてももう少し考えてみたい。そもそもホメロスの『イーリアス』は、「馬を駆って戦うトロイロス」を軍神アレースが殺してしまったと語るだけで、トロイロスはほとんど名前だけの存在であり、クリセイデは名前すらない。似ているのはアキレウスが捕虜にして愛し合ったブリーセイイスという女性である（アキレウスは彼女をアガメムノーンに奪われたため、怒って戦場に出なくなった）。——トロイロスとブリセイダの恋物語を創案したのはサント・モールのブノワ（Benoit）であり、その『トロイアの物語』（1160年頃）は3万行余のフランス語の韻文による大作で、「イングランドの宮廷でロマンスの普及に力を入れた」アリエノール・ダキテーヌ（Eleanor of Aquitaine）に捧げられている。彼はロマンスを愛したアリエノールのため、宮廷風恋愛の描写を加えたのである。そしてこの作品は1287年頃、メッシーナ出身の詩人・歴史家グイド・デッレ・コロネによってラテン語の散文に要約する形で翻訳され（『トロイア滅亡史』）、ヨーロッパ中に広まった。ジョバンニ・ボッカッチョもそれでトロイロスとブリセイダの恋物語を知り、自分も1335年頃、*il Filostrato*『恋の虜』

を書き、その時、ブリセイダ (Briseida) をクリセイダ (Criseida) に変えたのである。チョーサーはそれを材源としたので、やはり Criseyde としている。先に、トロイラスの魂の昇天について触れたが、それは『恋の虜』ではなく、ボッカッチョの別のロマンス *Tesaide* 『テセイデ』 11. 1-3 からチョーサーが挿入したものである (『カンタベリー物語』の「騎士の話」も *Tesaide* に題材を得ているので、Knight's Tale は *Troilus and Criseyde* より前に書かれた可能性がある)。こうしてチョーサーの作品の方がボッカッチョの原典よりも宗教的で、高尚な作品になっている。I, 976-80 でも、ボッカッチョのパンダロが「女はみな恋にあこがれて生きている (amorous)」と言っている所で、チョーサーは「この世の恋であれ、天上の恋であれ、(いやしくも恋の炎に心を焦がすことを嫌がるような者は、未だ嘗て存在しなかった)」と言う。

トロイルスとブリセイダの恋物語を加えたのはブノワであるが、アキレウスとポリュクセナとの恋は、ブノワが依拠したディクテュス (Dictys) の『トロイア戦争日誌』(4世紀頃)とダーレス (Dares) の『トロイア滅亡の歴史物語』(6世紀頃)にもある。ブノワはそれを参考にしてトロイルスとブリセイダとの恋を加えたのであろう。ポリュクセナはプリアモス王の末娘だが、ホメーロスには出て来ない。『イーリアス』は老王プリアモスによるヘクトールの遺体引き取り、それに続くヘクトールの葬儀で終わっており、従軍すれば必ず討死するという運命にも拘わらず、アキレウスはまだ生きている。そしてホメーロス以後の詩人たちによって、アキレウスがヘクトールの従兄弟にあたるエチオピア王メムノーンを討ち、トロイア市のスカイアイ門に迫った時、弓術に巧みなパリスによって急所である踵を射られ、アキレウスは死んだと語られる。これなら英雄の死にふさわしい。——ところが、ディクテュスとダーレスでは、アキレウスはポリュクセナへの恋ゆえに、戦いには出ないとプリアモス王に約束し、しばらく戦場に出なかった。が、部下のミュルミドーン人が多数トロイルスに殺されるのを見て、怒りに駆られてトロイルスを殺したのだった。そして二人の勇敢な息子を殺されたヘカペーの策略により、アキレウスはポリュクセナへの愛のため、武器を一切持たず、アポローンの神殿へ行く。そこへデーイフォバスがやって来て、祝辞を述べながらアキレウスを

抱擁し、彼にしがみつく。そしてパリス（アレクサンドロス）が剣を抜いて走り出て、アキレウスの脇腹に二撃を打ち込む。――「ご自身の浅はかな大胆さゆえにやられたのです」と言うアイアースに、アキレウスが息を引き取りながら言う、「デーイフォバスとアレクサンドロスがわたしを打ち負かしたのだ。あの二人はポリュクセナのことでやって来た、人をだますつもりで、じつに卑劣にも」と。勇将にふさわしからぬ、実にあっけない殺され方である。彼が息を引きとると、アイアースは遺体を肩に担いで森の外へ運び出す。

「ことの起こりは間男と淫売女じゃねえか・・・」とサーサイティーズが言うのは、パリスがメネラーオスの妻のヘレネーをかどわかったことがトロイア戦争の原因となったと言っているのであるが、これには昔からの因縁があったのだ。というのは、その昔、ヘーラクレスのトロイア遠征の際、トロイアの王ラーオメドーンは殺され、子供たちもプリアモスを除いて殺されたり、拉致されたりした。プリアモスの妹のヘーシオネー（Hesione）も連行され、サラミスの王テラモーンに与えられた。そして二人の間に生まれたのがアキレウスに次ぐ關将のアイアースである。ヘクトールともしばしば闘ったが、二人は従兄弟同士だったのだ。身体が大きく、忠実で勇敢であるが、シェイクスピアは彼のこともサーサイティーズに「馬のほうがまだ話がわかる」と言わせている。それを知ったら、『アイアース』を書いたソポクレスはどう思うだろう。

アキレウスは一騎打ちによってヘクトールを殺した後、その死骸を戦車に結びつけて引き回し、辱めている。この行為はヘクトールがパトロクロスを殺し、その遺体を引きずって行ったことに対する仕返しであるが、あまり感心しない。しかし、彼は部下たちにヘクトールを殺させたりはしていない。シェイクスピアの描くアキレウスの卑劣な殺し方はブノワが始めたように思われる。そしてシェイクスピアは、ブノワにあるアキレウスによるトロイルス殺害をヘクトール殺害の場面に利用したようである。それが可能であるのは、シェイクスピアではまだトロイラスは生きているからである。先ず、ヘクトールの場合、要約すると、

アキレウスが戦場に戻ってみると、ヘクトールが一人の王を倒し、彼を捕えて自分たちの部隊へ引き立てようとしていた。その時、彼は王の面頬を掴み、自分の盾を外していた。彼の胸が露わになっているのを見たアキレウスは、槍を構えてヘクトールに向かって一直線に馬を駆けさせ、致命傷を負わせた。

アキレウスが戦場を離れたのはヘクトールと一騎打ちをし、彼に槍で腿の中ほどを突かれたからであった。それでも、アキレウスがヘクトールの隙に乗じたからであろうが、ブノウはアキレウスのことを「あの極悪人は (li coilverz)」と呼んでいるのである。次に、トロイルスが殺される場面を前田弘隆氏（広島商船高専）の訳で引用する：

- トロイルスは、自分を血祭りに上げようと
周りに殺到する敵を見て
すっかり、猛り立つ。
彼は、研ぎ澄まされた剣を抜いた。
- 21415 詰め寄る敵を迎えると、次から次へと切り倒す。
目指した敵を一人とて取り逃がすなどという懸念は彼
にはなかった。
敵が一番密集している所へと飛び込んでいく。
手の届く相手は誰でも、彼の手にかかった。
ダーレスの語るところによれば、これまで誰も
生身の人間で、これほどの、かくも激しい殺戮を
- 21420 かくも大量の殺害を
目にしたことはなかったという。
大地には血の川が流れる。
並み居る敵を切り刻み、
その息を絶ち、四肢を切り落とし負傷させる。
- 21425 彼らを追い立てるその時
彼の愛馬が殺された。
二方から剣で打ち掛かれて
踏みとどまることが叶わなかったのだ。

その場で大地に横たわった。

- 21430 トロイルスも背に乗ったまま倒れこんだ。
彼のそばには、供の兵も仲間もいなかった。
彼が立ち上がろうとするその前に、
倒れこんだ彼のもとにアキレスが駆け付けた。
ああ、何ということ、アキレスは直ちに
- 21435 彼目がけて何太刀も剣を振り下ろした。
そして、アキレスが何度も打ち付けたので、
とうとうトロイルスの兜が脱げて、頭がむき出しになっ
てしまった。
トロイルスは身を守って激しく防戦に尽くしたが、
それが何の役に立とうか。
- 21440 何をしても、護身の役には立たない。
というのも、変節漢たるアキレスは、
トロイルスが救援も加勢も得られぬうちに
その首を打ち落としてしまったのだから。
あまりに残忍な仕打ち、狂気に逸った行為を
- 21445 彼は為した。そうまでせずとも良かったろうに。
思い出してはそれを悔やむことになるだろうに。
アキレスは自分の乗馬の尻尾に
その高貴なる若者の死体を結び付ける。
それから、その死体を引きずり回し、
彼の軍勢の兵たちはその死体をしかと目にしたのだ。

ここでもブノワは「変節漢たるアキレスは」と呼んで、彼の行為を非難している。彼が愛馬もろとも大地に倒れ込んだトロイルスを襲ったからである。ただ、彼の頭がむき出しになったのは、アキレスが何度も剣を振り下ろしたからである。しかし、グイドの翻訳では、部下のミュルミドーン勢がしたことになっており、アキレスの卑劣さが一層強調されている。グイドはよほどホメロスが気に入らないとみえて、「アキレスは裏切りによってヘクトールを死へ追い込んだ、哀れなホメロスよ、アキレスは策略による以外は、勇猛果敢な人物を誰一人殺していないのだ」と言う（第二十六巻）。チャーサーもブノワ

やグイドのホメーロスに対する反発を知っており、それは彼らの「妬み」のせいだと『名声の館』（第 1476 行）に書いている。さすが英詩の父である。

すぐ前に、卑劣な殺し方はブノワに始まるようだと書いたが、もしかしたらディクテウスまで遡るかも知れない。「アキレウスは、少数の忠実な仲間を選んで、トロイア勢に対して伏兵を置くよう急いだ。彼は、彼らの無防備なところを襲い、彼らが川を渡ろうとしていたところを包囲し、何が打ちかかってくるのか分からぬうちに、彼らを殺した。ヘクトルならびに彼と一緒にいたもの全員が殺された」（岡三郎訳）と書いているからである。ブノワもこれを知っていたに違いない。「無防備なところを襲う」というのが共通のキーワードである。ヨーロッパの人たちは一体にトロイア最悪なのだろう。英国の神話上の祖先である Brutus はトロイの勇士 Aeneas の孫であり、アエネーアースは古代ローマ建国の祖ということになっているからである。しかし、ギリシア側に立ってトロイア戦記を書いたクレタのディクテウスは、なぜこのような記述をしたのだろうか。―― ディクテウスの『戦争日誌』は 4 世紀頃ラテン語に翻訳されたが、原本はギリシア語で書かれていたらしい。ホメーロスでは神々が人間たちの戦闘に積極的に介入する。一方、ディクテウスはそのような神々の介入を排した戦記を書いたと言われる。確かに、岡三郎訳で読んでみると、実際の戦争はこうだったかも知れないと思うくらいリアルである。ディクテウスはしばしばギリシア軍を「わが方」、トロイア軍を「野蛮側」と呼ぶ。そして戦争の準備に 8 年もかかったと言う。さらに、上陸を容易にするため、トロイアに友好的であった近辺の諸都市を攻略している。それから一番印象に残ったのは、一騎打ちの数と同じくらい騙し討ちや裏切り等の破廉恥な行為が多いこと、英雄らしい英雄が少ないことである。

先ず、ユリシーズ（オデュセウス）とディオメデースによるパラメデース殺害（ホメーロスにはない）。二人は、とある井戸の中に黄金を見つけたと偽り、彼をその井戸の中に入らせ、上から石を投げて殺したのだ。こうしてギリシア軍の総指揮官になってもおかしくない英雄は、「もっとも下劣な男達の手にかかって」死ぬ。動機は「敵意と羨望」である。トロイア戦役で最も功のあったアイアースの死も暗殺

によるものである。疑われたのはまたしてもユリシーズ、それにアガメムノンとメネラーオスである。アイアースとユリシーズがパラディオン（パラス・アテーナーの古い神像）をどちらが所蔵するかで対立した時、結局、神像はユリシーズの手に渡り、アイアースは心底怒っていた。翌朝、「戸外で、死んでいる」アイアースが発見される。彼は戦争の原因となったヘレネーは殺されるべきだと主張し、まだ彼女を愛していたメネラーオスは、ユリシーズの介入によって彼女を取り戻していたのだ。その後、ユリシーズはパラディオンをディオメデーヌに残して逃亡する。―― アキレウスのあっけない最期は先に見た通りである。また、アガメムノンがアルゴスに帰還した時、妻のクリュタイムネーストラーは同棲していたアイギストスに夫を殺させている。そして二人は、後にアガメムノンとクリュタイムネーストラーの息子であるオレステースによって殺される。ユリシーズも自分の息子のテーレゴノスに殺される。

トロイア側では敗色濃厚となった時、プリアモスは貴族たちの意向に服し、講和を結ぶべくアンテノールをギリシア方に行かせる。交渉から帰ってきたアンテノールは長い演説をして、ギリシア人たちは悪くはない、悪いのはヘレネーとプリアモス王であると言った。また、女祭司を買収してトロイアの身代わりであるパラディオンを手に入れていた。アンテノールにはプリアモスの富の半分が与えられ、息子の一人がトロイアを支配することが約束されていたのだ。そしてギリシア方にミネルヴァ神に木製の馬を奉獻するようにと助言したのは、プリアモスの息子のヘレノスである。彼も命が保証されていたのだ。アエネアースも、忠実であり続けるという条件で、家が害されないことになっていた。これらはいずれも国家に対する裏切り行為である。講和が成ったというので、トロイアの同盟軍は支払いすら待たずに帰国した。それから木馬を城内に引っ張って入れるため、あの堅固な城壁が半ば破壊された。

ところで、ディクチュスの2世紀ほど後に翻訳されたダーレスの戦記では、トロイの木馬は出て来ない。また、アキレウスによるヘクトール殺害も、『イーリアス』と同様、一騎打ちである。予言者カルカースはホメーロスとディクチュスではギリシア人であるのに、ダーレス

ではトロイアと同盟関係にあったブリュギア人、そしてブノウやグイドではギリシア方に寝返ったトロイア人の司祭となっている。どれが正しいのだろうか。ディクチュスはクレタのイドメネウスの仲間として従軍したと言うし、ダーレスも「自分の眼で事実を見るがままに」書いたと言うが、いずれも「偽書」とされている。後代のブノウが種本としたのはこれらの偽書であった。そしてシェイクスピアの描写はディクチュスのそれに似ている。――シェイクスピアの『トロイラスとクレシダ』のソース（材源）は、チャーサーの『トロイルスとクリセイデ』ではなく、ジョン・リドゲイト（John Lydgate）の *Troy Book* 『トロイの書』か、ウィリアム・キャクストン（William Caxton）がフランス語から翻訳した *Recuyell of the Historyes of Troye* 『トロイ史集成』、恐らく後者であろうと言われている。が、いずれもグイドのラテン語散文を下敷きにしている。リドゲイトは Henry IV の命令で 1414 年に訳し始め、6 年もかけて 3 万行の韻文訳に仕上げている。キャクストンの翻訳は英語の最初の印刷本（1474 年）である。彼がまだブルージュにいた頃、ブルゴーニュ公爵夫人マーガレットから頼まれてラウル・ルフェーブル（Raoul Lefevre）の *Le Recueil* を英語の散文に翻訳したものである。従って、ヘクトールが殺される場面はブノウやグイドの描写とほぼ同じである。キャクストンには「しかし、ヘクトールは彼（アキレウス）にすごい力で投げ矢を投げ、彼の太腿に傷を負わせた。そのときアキレウスは戦闘から外に出て、傷口を縛らせると、今度ヘクトールに出会ったら殺してやろうと大きな槍を手を取った。その間、ヘクトールはとても入念に、かつ立派に武装した一人のギリシア人の貴族を捕えていた。そして彼を軍勢から楽に連れ出せるように、盾を自分の背中に投げかけており、胸が露わになっていた。彼がこの格好でいたので、密かに近づくアキレウスに気づかず、その槍でからだを貫かれたのだった」とあり、リドゲイトもほぼ同じ。シェイクスピアでは「おれはこのとおり武装を解いている、待ってくれ」と言うヘクターを、アキリーズは「これが目指す相手だ、討つてとれ」と言って、部下のマーミドンたちに四方八方から猛烈に斬ってかからせ、ヘクターは惨殺される。ここでは殺したのはアキレウスではなく、部下たちである。そしてこれは、先に見たように、グイドの描くアキレウスによるトロイラス殺害の場面と同じであった。このよ

うな描写はディクテュスに始まり、反ホメーロスのブノワとガイドによって「完成」され、シェイクスピアによって利用されたと言えるだろう。

参考文献

- Barry A. Windeatt, ed., *Geoffrey Chaucer Troilus & Criseyde*
(Longman, 1984)
- John Lydgate's *Troy Book*
(<http://www.lib.rochester.edu/camelot/troyprfr.htm>)
- H. Osker Sommer, *The Recuyell of the Historyes of Troye*, 2 vols.
(London: David Nutt, 1894)
- Léopold Constans, *Le roman de Troie par Benoit de Sainte-Maure*
(Johnson Reprint, 1968)
- 石井美樹子、『王妃エレーノール』（平凡社、1988）
- 泉井久之助訳、『アエネーイス 上・下』（岩波文庫、1976）
- 岡 三郎 訳・解説、『ディクテュスとダーレスのトロイア戦争物語』
(国文社、2001)
- 岡 三郎 訳・解説、『ガイド・デッレ・コロネ トロイア滅亡史』
(国文社、2003)
- 岡 三郎 訳・解説、『ジョヴァンニ・ボッカッチョ フィローストラ
ト』（国文社、2004）
- 小田島雄志訳、『トロイルスとクレシダ』（白水社、1983, 1988）
- 高津春繁、『ギリシア・ローマ神話辞典』（岩波書店、1960, 1988）
- 松平千秋訳、『イリアス 上・下』（岩波文庫、1992）
- 宮田武志訳、『ジェフリー・チョーサー トゥローイラスとクリセイデ』
(ごびあん書房、1987)